

1) ルネッサンス：原典主義＝自由意志（自由検討）libre arbitre

人間主義（ユマニスム humanisme）：人間の罪を絶対的なものとする中世神学の考え方に対して、人間理性（自由意志）の力を重視し、ギリシャ・ラテンの古典と聖書を原語で読み、当時のテキストをありのままに再生しようとした知的営為。こうした古典原典研究者たちをユマニストという。

①ギリシア・ラテン古典文芸と聖書の再評価→Renaissance（文芸復興）<renaître（再生する）

②宗教改革→Evangélisme（福音主義）＝カトリック教会の典礼・形式主義を排し、聖書原典（特に新約聖書の四福音書）に基づく信仰を唱える。1510年頃から活動が活発化した。

【主な人物】

・デンデリウス・エラスムス（1466-1536）：オランダのユマニスト。風刺的な文明批評『痴愚神礼賛』（1511）、新約聖書の初のギリシア語原典印刷本『校訂新約聖書』（1516、歴史的・語学的注解と自身によるラテン語訳つき。高度に実証的な原典批評の方法を聖書に適用。制度化され靈性を失ったキリスト教から、実質の意味を盛られた聖書と、そこに示されるキリストの福音とに立脚する信仰（福音主義）への転換を促した。）

・ジャック・ルフェーヴル＝データブル（1450-1546）：アリストテレス研究者から、次第に聖書の原典研究に打ち込むようになる。『聖パウロ書簡注解』（1511）などを上梓し、キリスト教信仰の本質を信徒個人による聖書との深い接触に求めた。聖書の初めてのフランス語訳を完成（『新約聖書』1523、『旧約聖書』1530）。ルター派とは一線を画す。

・ギヨーム・ビュデ（1468-1540）：ギリシア学者。『ギリシア語考』（1529、再版1548）。フランソワ1世に進言し、ユマニスト的研究教育の中心として「王立教授団」を設立（1530、コレージュ・ド・フランスの前身。ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語の研究機関。中世神学の牙城ソルボンヌ神学部と対抗する。カルヴァンもここでギリシア語とヘブライ語を勉強した）。

【テキスト読解】フランスルネッサンスの理想

ラブレール（1484-1553）

「ガルガンチュワの手紙」→教育論（古典語学のススメ）

「テレームの僧院」→自由意志論（「汝の欲することをなせ」）

「尿の川」→縁起話形式による1532年のパリ案内（ラブレールの両義性、高貴と野卑の融合）

2) フランス語の擁護と顕揚

出版史：15世紀半ばの活版印刷術の発明とその後の急速な普及

ラテン語本からフランス語本へ（フランス語出版物が主流化）

→ルフェーヴル＝データブルによる聖書仏訳。また、ジャン・カルヴァンの『キリスト教綱要』は1536年にラテン語で出版されたが、1541年にはフランス語版に書き改められた。

1539年「ヴィレール＝コトレの勅令」（法律文書はラテン語でなくフランス語で書くことに）＝国語政策

1549年『フランス語の擁護と顕揚』（デュ＝ベレー）＝国語（フランス語）文学の洗練を目指す

【テキスト読解】フランスルネッサンスの代表的詩篇

ロンサール（1524-1585）『恋愛詩集』

デュ＝ベレー（1522-1560）『哀惜詩集』

3) 宗教戦争

旧教（カトリック）側の反動強化と新教（プロテスタント）側の過激急進化

きっかけは1534年10月の「橄欖事件」。狂信的な新教派が旧教のミサを非難する文書を王フランソワ一世の部屋に張ったほか、各地に撒き散らした事件。これ以後、新教徒弾圧が激化する。

・アンボワーズ陰謀事件（1560年3月）

・ヴァシーの虐殺事件（1562年3月）

・聖バルテルミーの大虐殺（1572年、新教徒大虐殺事件）

旧教側＝パリ大学神学部（中世カトリシズムの牙城）。後ろ盾はパリ最高法院、大封建貴族（ギューーズ家）。

新教側＝穏和派福音主義者。急進派（カルヴァン）。後ろ盾は王家（不安定だった）。

最後は、新教派の頭目だったアンリ・ド・ナヴァール（後のアンリ四世）が旧教に改宗して政治決着。1593年改宗、1598年「ナントの勅令」。これによって信仰の自由が認められる。

【テキスト読解】モラリスト文学の古典

モンテーニュ（1533-1592）『エッセー』